

唯一無二の生きる大地

「桜島」を撮り続ける

ということ

徳島県在住の写真家・宮武健仁さん。子供の頃の思いを胸に車で約10時間の鹿児島までの道のりを通い続け、桜島を撮り続けてきた。世界的写真雑誌「ナショナル・ジオグラフィック」でも掲載されたその写真は、桜島が生きているということを実証する一枚。昨年12月に、昭和火口の噴火写真を掲載した写真絵本「桜島の赤い火」も発刊した宮武さんに、桜島との出会いや魅力、写真家としてのこれからの抱負を伺った。

写真家

みや たけ ひと  
宮武 健仁さん

Takehito Miyatake

## 桜島と出会った

### きっかけは？

私は徳島県在住ですが、ここは日本で最も火山から遠い県なんです。四国はもちろん、関西にも活火山はありません。そのような場所で暮らしていることもあり、ごく最近まで徳島の中学生は修学旅行で熊本の阿蘇山に行き、火山体験をするのが定番でした。

私も中学生のときに阿蘇山を訪れ、赤い溶岩が見えるのではと期待していたのですが、火口をのぞいたら湯気しかなくがっかりしました。その体験からいつか赤いマグマが流れる火山を見たいという思いが生まれ、大人になっても心の中に持ち続けていました。

地元で写真家として働くようになってから、撮影で博多を訪れたことがあり、その際久しぶりに阿蘇山まで



「自分はじっくりと待って撮影していくタイプ」と語る宮武さん。噴火や火山雷の写真は1週間待っても撮れないこともあるという。

足を延ばしました。そのとき出会ったアマチュアカメラマンの方にどうしても赤い火山を見てみたいという思いを話したら、鹿児島島の桜島は毎日のように噴いているということを教えてもらいました。

それを機に初めて桜島の撮影に訪れて以来、桜島に頻繁に足を運んで撮影するようになりました。

## カメラマンになった

### 経緯は？

小学生のときに父からクラシックカメラを借りたことがきっかけで、旅先で感動した景色などをよく撮影していました。高校の写真部時代には全国総合高校文化祭の徳島代表に選んでいただき、写真が記録する手段だけでなく、評価の対象にもなることにも気づきました。また、同じ高校の先輩に写真家の立木義浩たつきよしひろさんがいらっしやったこともあり、自然と写真に関する仕事を目指し始めた気がします。

東京にある写真工学の大学を卒業後、和歌山にある現像機を作るメーカーに就職。当初は開発に携わる予定でしたが、撮影やカメラマンを養成する部門に配属され、新人でいきなり指導する立場になりました。

退社後、地元に戻り、写真家として独立して今に至ります。現在は広告の

写真を中心にさまざまな撮影を行っています。

## 宮武さんが考える

### 鹿児島や桜島の魅力は？

桜島を撮影するために何度も鹿児島を訪れましたが、鹿児島の人にはほかの地域にはない真面目さがあると思います。朝、桜島の黒神橋で撮影していたとき、通学途中の黒神中学校の生徒が必ずと言っていいほど、わざわざ立ち止まってあいさつをしてくれました。徳島だったら考えられない光景でした。

また、鹿児島のごこの学校に行っても、入り口の靴がきれいに並べられていることにも驚きました。鹿児島の方は意識していないかもしれませんが、真面目さの根底には桜島の存在があるのではないかと思います。ほぼ毎日噴火する桜島は、まさに生きている山です。しかしそれは常に火山灰が降ることというだけで、時には迷惑になることもあるでしょう。鹿児島の人は自然の力を潜在的に知っていて、そのような刺激を毎日受けているからこそ、あの真面目さが生まれてきたのではないかと思います。

桜島は当初、徳島から一番近い活火山という認識でしたが、撮り続けていくうちに、観光資源としての大きな可能性を感じるようになりました。さら

に写真家としての視点で見ると、海も空もある被写体として素晴らしい山です。世界でも有数の火山大国である日本の中でも、唯一無二の存在だと思います。存在そのものに価値があり、桜島を見るためだけでも鹿児島島に行く意味があると思います。

## 写真家としての

### 今後の夢、目標は？

桜島と出会ったことによって、桜島以外の火山はどうなのだろうということに興味を持ち始めました。また、火山は自然のものなのにまるで人間が造ったかのようなきれいな円錐形の山もありますし、マグマが地中で固まる際に作り出す六角形の岩など、火山が作り出した幾何学的な模様にも最近心が引かれています。

たとえ赤い火は写っていなくても、そこにあるものは火山が作り出した美しい光景。これからも桜島はもちろん、火山が生み出した日本中の美しい景色を撮っていきたいと思っています。

